

## 2. まちづくり基本構想の施策の進捗状況の点検及び評価

### (1) まちづくり基本構想 施策7-1

「国内外の人が何度も訪れたい魅力を磨く」

まちづくり基本構想等策定後のこれまでの取り組みの尽力と現場での奮闘には感謝したい。しかしながら、実績値の構成要素（背景）の読み解きは今後ますます必要になっていくだろう。例えば、観光入込客数の実績の明細（新規訪問者／リピーター、年代、国籍など）や SNS の発信者やその閲覧者の属性、各コンテンツへのアプローチの実態などをビッグデータや AI も活用して実績を分析し関係者で共有することで、目標値設定などの解析度も上がるのが期待される。満足度についても「何に満足したか」を知ることのできる調査項目を設定することで、表のプロモーションに限らず、トイレや駐車場などの施設整備やボランティアガイドの育成などのハード・ソフト両面のバックヤードまで意識した打ち手がより明確になっていくのではないかと。

また、人が多く訪れるなどの「量」だけを良しとするだけでなく、ガイド料を取るといったことにより、「質」を向上させることも重要ではないか。質の高いものや労働力のかかるものを無料で提供する時代は終わっている。ボランティアガイドについてはプロフェッショナルとして活躍できるように、必要な経費等を支払うなどの環境整備も行うほうが良いのではないかと。

一方で、福津市は「住みたいまち」といわれているために、この住民の「住みやすさ」と住民以外が訪れる「観光」を両立して振興するための視点を持たなくてはならない。

例えば、近年オーバーツーリズムなどに起因する「観光公害」が問題となっているが、福津市では観光地と居住地のゾーニングや住民への啓発を行っているのだろうか。住みやすいまちほど観光に対して嫌悪感が出てくることもあるため、必要に応じて観光の打ち出し方を住民へ周知しなければ反発が起きてしまう可能性もある。実際に海沿いの道などは週末渋滞となっており、住民は大変である。元々福津市は非日常的な観光の町ではなく、日常の暮らしやすさに重点をおいた町であったならば、日常を崩さないようにバランスをとって観光を打ち出す必要がある。指標として訪問される側である住民の満足度の視点も必要ではないか。そうすると「住みやすいまち」に着目するのであれば、「市民が楽しむ観光」という視点があっても良い。

このように、福津市は「日常（暮らし）」と「非日常（観光）」のゾーニングやバランスを常に意識しておくことが肝要とされるまちのように感じる。

基本構想が策定されたころは、自然を守りながら人を呼び込むということで観光なども推し進められたようであるが、現在は状況が変わっており、市民の幸福を追求することも求められる。併せて関係人口を大切にするためには、イベントやワークショップなどのコンテンツが大切である。市民限定の「郷育カレッジ」も市外の方も参加できる講座になれば、講座に参加するために市外から来訪し、食事などの消費も発生する。そのような場合も観光客として数えられる。このような「市民に着目した観光プラン」として地域行事など市民の暮らしや生活の質（Quality of life）が福津市の魅力であり、観光についてもこれをアピールするという方法が持続的であるように思う。

これらを踏まえると、従来の考え方に流されない、「福津市にとっての観光、交流人口や関係人口、インバウンドとは何か」を考え、福津市の規模に合わせた観光や事業を検討する必要がある。改めて市民（住民）にとっての「観光」とは何かを考えるとともに、そもそも福津市にとっての「観光」とは何かを問い直す時期に来ているのかもしれない。

## (2) まちづくり基本構想 施策4-2

「暮らしやすさを実感できる生活基盤を整備する」

まちづくり基本構想等策定後のこれまでの様々な取り組みの尽力と現場での奮闘には感謝したい。個別にはまだまだ課題はあるものの、全体としてはできる限りの努力をしていることは評価できる。

しかしながら、公共交通に関しては、満足している市民の割合が基準値から著しく低下している現状は看過できない。特に、福津市のコミュニティバスはそれぞれの地域と福間駅をつないでいるものの、各地域同士をつなぐ路線がないことは気になる。コロナ禍や運転士不足などの様々な要因に伴う減便、路線再編など、これまでのトピックを総合的に勘案してほしい。

一方で、今後は視点を変える必要もある。例えば、学校や病院、スイミングスクールなどとの共同運行や周辺自治体との広域連携による運行など、あらゆる手段を用いて「人が動くこと」への対処を考えることは急務である。遠からず現行の民間バス事業者が撤退する可能性もあることをシミュレーションしておいた方がよい。財政負担とのバランスも考慮して、周辺自治体の取り組みも参考にしながら、市民のニーズへの丁寧なリサーチ方法も研究を重ねて、さらなる改善を図って暮らしやすさとともに利用者を増やすための対策を講じていただきたい。

道路補修等の要望に対しても、財政面と職員体制の課題はあるものの、安全・安心を確保するための優先度をつけることは必要である。加えて、道路の修繕や冠水箇所などについて、早期発見を行うような仕組み（特に DX）も必要。例えば、福岡市では LINE を活用して気軽に写真を送ることができるようにして発見から修繕までの時間を短くしている。福津市よりも市域が広大で補修の必要な箇所の発見にかかる職員の人員をさけないのではないかと推察されるが、発見後は各区役所から速やかに対応できる体制が整っていると聞く。福津市の市域の状況や職員体制に合わせた方法を検討してほしい。

併せて、福津市は人口増加に伴い交通混雑度が上がっているため、生活道路の交通量も増えてきている。シェアサイクルなど自家用車の代替手段の活用も視野に入れる必要が出てくるかもしれない。また、今後観光客の増加などの施策に伴う交通量の増加のことも考慮すると、根本的な渋滞解消に向けた対策を今から着手することも必要になってきているのではないか。

また、市道等の除草作業等の市民活動については、コミュニティスクールとの連携を図ると良いのではないか。例えば、福間東中や津屋崎中ではボランティア部が発足しており、郷づくりと連携している。学校側もボランティアの場を求めており、未来共創センターで行政の課題を学校や個人、市民団体、企業などの地域貢献の場として提供することでマッチングできるとよい。その際、情報の出し

方として、課題についていかに前向きな道筋を示せるかが重要である。松林清掃もやった成果を示すことで子どもの自尊感情を高め、子どもの方からできることはないか求めるようになると聞く。市民との共働に関しても、定住人口と関係人口の間に「定住はしていないが関係人口より踏み込む」という位置づけに「共働人口」という考え方も出てきているので、手伝ってほしいことを具体的にメニュー化して発信してみてもどうか。

一般的に、このままでは利便性や人口移動等を鑑みても農村部は生活基盤の消滅危機に陥る可能性が出てくると思われる。これはSDGsの目標である「誰ひとり取り残さないこと」とも合致せず、福津市の良さである自然との共存もできなくなる。今回の施策に含まれる事業の多くは地図に落としこむことが可能である。DXを活用して地図で示されることで全市的かつ個別の課題イメージが共有しやすくなるため、市民に啓発する意味でも検討してみてもほしい。